

## コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

### オオシマザクラ (*Cerasus speciosa* (Koiz.) H. Ohba)

上條隆志 (筑波大学生命環境系)  
kamijo.takashi.fw@u.tsukuba.ac.jp



オオシマザクラは緑化樹種として広く用いられるサクラの野生種であり、名前は其の自生地である伊豆大島に由来する。花期は3月下旬から4月上旬であり、花卉の色は基本的に白色であるが、淡紅色を帯びるものもある。花は葉と同時に開き、大型の花弁からなる白色の花と緑色の葉とのコントラストが特徴的である。葉は無毛で、葉の鋸歯の先が長く尖る。高さ15m以上、胸高直径は1m以上になり、伊豆諸島では優占林を形成することも多い。伊豆諸島、伊豆半島、房総半島などに分布し、特に、伊豆諸島では大島から青ヶ島に至るほとんどの島に自生している<sup>7)</sup>。植物区系学的にみると、オオシマザクラはフォッサマグナ要素の島嶼型の種とされるが<sup>7)</sup>、後述するように緑化樹種として植栽されるため、本来の分布域を正確に特定することは難しい。一方、伊豆半島などの本土では優占林を形成することはないが、分布の中心域である伊豆諸島では、オオバエゴノキなどと共に落葉広葉樹二次林の優占種となる。これらの森林は、コナラなどの本土の落葉広葉樹林の主要構成樹種を含まないこと、伊豆諸島の固有分類群を多く含むことから、植物社会学(群落分類学)では、オオバエゴノキ-オオシマザクラ群集と位置付けられ、伊豆諸島の固有群落とされている<sup>5)</sup>。本群落が最も広域的に分布するのは伊豆大島であり、大島内で最も広い面積を占める群落となっている。オオバエゴノキ-オオシマザクラ群集は、江戸時代から行われてきた製塩業に必要な薪生産のための伐採によって成立した二次林と考えられる<sup>5)</sup>。また、オオシマザクラは二次林に生育するだけでなく、大島、三宅島、八丈島の年代の新しい溶岩上などでは、一次遷移途中の森林や低木林にも本種が自生している。このように伊豆諸島では本種が広く自生するため、早春の島では山腹をオオシマザクラの白い花が彩ることとなる。

主要な緑化樹種の一つである本種は鑑賞目的で植栽されることも多いが、ソメイヨシノなどの苗木育成のための台木として用いられることも多い。鑑賞を目的とした緑化の他、耐塩性や亜硫酸ガス耐性に富むとされるため、海岸線の緑化や煙害地の緑化にも用いられる<sup>4)</sup>。日立鉾山の煙害跡地では、ヤシャブシなどと共に本種が山腹斜面に植栽され<sup>1)</sup>、現在は高木となっている。緑化以外の利用としては、薪炭の他、桜餅を包む塩漬の葉<sup>6)</sup>として利用される。また、黒く完熟した果実は食用となる。本種は、多くのサクラ園芸品種の作出

に用いられてきたとされ、ソメイヨシノ、サトザクラ系、カワヅザクラなどについては本種との交雑によって生じたとされる<sup>3)</sup>。

以上のようにオオシマザクラは有効な緑化樹種であるとともに、園芸品種の作出上も重要な遺伝資源であるが、近年、本種による生態系の攪乱が問題視されるようになってきた。オオシマザクラの植栽が全国的であると同時に、各地で野生化が報告されており、侵略的外来種として増加することが危惧されている<sup>4)</sup>。また、植栽された本種によるヤマザクラなどの本土に自生するサクラに対する遺伝的攪乱も危惧されている<sup>4)</sup>。一方、本種の自生地についても、本土からのサクラの持ち込みが、自然集団を保全する上での懸念事項となっている。主たる分布域である伊豆諸島では自生しているサクラの仲間は本種のみであり、本土からの島へのサクラの持ち込みは、遺伝的攪乱を引き起こす可能性が高い。オオシマザクラの自生集団については、伊豆半島、伊豆諸島の大島から八丈島にかけて地理的変異が存在することが確認されており<sup>2)</sup>、生物地理学的重要性も有している。資源的価値が高い本種の遺伝的多様性・独自性を保全しながら、緑化樹種として活用してゆくルールと技術を確立することが強く望まれる。

#### 引用文献

- 1) ジャパンエナジー・日鉾金属株式会社編(1994)大煙突の記録:日立鉾山煙害対策史. 日鉾金属, pp. 167-180.
- 2) Kato, S. et al. (2011) Genetic structure of island populations of *Prunus lannesiana* var. *speciosa* revealed by chloroplast DNA, AFLP and nuclear SSR loci analyses. *J Plant Res.* 124 (1): 11-23.
- 3) Kato, S. et al. (2014) Origins of Japanese flowering cherry (*Prunus* subgenus *Cerasus*) cultivars revealed using nuclear SSR markers. *Tree Gen. Genom.* 10(3): 477-487.
- 4) 勝木俊雄(2015)仙台湾岸の海岸林におけるオオシマザクラの分布(保全情報). 保全生態学研究, 20(1): 101-103.
- 5) 宮脇昭編(1986)日本植生誌7, 関東. 至文堂, pp. 440-447.
- 6) 七海絵里香ほか(2013)伊豆半島松崎町における桜葉畑景観の成立過程. ランドスケープ研究, 76(5): 443-446.
- 7) 高橋秀男(1971)フォッサマグナ要素の植物. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学)(2): 1-63.



オオシマザクラの花（三宅島）



オオシマザクラの葉（八丈島）



山腹を彩るオオシマザクラ（新島、撮影：八木正徳）



三宅島の1983年溶岩（35年経過）に定着したオオシマザクラ



三宅島の1962年溶岩（52年経過）に生育するオオシマザクラ



オオシマザクラの巨樹（新島、撮影：八木正徳）